

# 浄泉寺

通信  
第22号

その人は金沢市街を流れる犀川さいがわのそばに生れ、寺院で育ちました。寺院の寂しい一室で本を読んだり書いたりするのが好きな少年でした。養父だった住職は茶が好きで、茶をいれては茶の間から呼んでくれ、二人で朝や午后やを匂ひの高い茶をのみ、「それが私の読書や詩作を非常に感銘させてくれた一つの物であった」と後に語っています。

ふるさとには遠きにありて思ふもの

そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土かたぢの乞食かたぢとなることも

帰るところにあるまじや

ひとりの都のゆふぐれに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころも

遠きみやこにかへらばや

遠きみやこにかへらばや

その人、室生犀星むろねいせいはこの詩句の通り、文壇に盛名を得た後も金沢にほとんど戻らず、代わりに犀川の写真を貼っていたといひます。ふるさとを熱烈に思う郷愁と、帰ったとて記憶のなかのふるさとはもはやそこには残っていないことを受け入れる理性とが、折の重なるよつこに自分を襲ってくる詩です。

わたしたちは、外界の事物が世界を構成していると思つています。しかし実際は、わたしたちの脳が過去の経験の記憶に基づいて世界を構成しています。現代の認知心理学ではそう指摘し、2600年前に仏教を開かれた釈尊も同様のことを残しています。

目で見る世界が真の世界ではなく、脳が自分に都合の良いように世界を創っている。人は自分で意味を創り、自分が紡ぐ意味の網を張りめぐらせた世界に住んでいると言つ人もいます(大井玄『病から詩が生まれる』)。あるアルツハイマー病の女性が病棟を抜け出し、自分のアパートに帰ってしまったことがあったそうです。病棟医とナースが連れ戻しに行き、「保健所から来ました」と言つと、自分の部屋に素直に入れてくれました。そこには市松人形が二つ寝かされていました。彼女の夫の具合がよくないから一緒に来てくれ、という出まかせの理由を言つと、彼女は疑うことなく承諾しました。「ちょっと待ってください、子どもたちにご飯をあげますから」と言つて、人形に食べさせるしぐさをしたあと、病棟へ戻ったそうです。わたしたちの認知する外界とはつながっていませんが、この女性の脳に蓄えられた経験と記憶が創る「意味の世界」にこの女性は生きていて、それは認知能力の低下が有る無しにかかわらず、誰もが同じく当てはまるのだそうです。

室生犀星は生後まもなく生家近くの寺に最初は私生児として迎えられ、住職である室生家の養子となつたのは7つの時。実の両親の顔を知らずに育ちました。繊細かつ鋭い感性の少年だったのだと思ひます。その寺は犀川に面し、そこから眺める犀川と周辺の自然を長く愛した人でした。

何といふ善良な景色であらう

何といふ親密な言葉をもつて

温良な内容を聞いてくれる景色だらう

(「犀川の崖辺」)

文学を志して上京したものの、ふるさとを一歩出れば世界はつらいことに満ちていました。ふるさとの川の景色は、養父母の慈愛を一身に受けた時代の体験と一緒に記憶され、自らを慰め励ますよ

りどころだったことでしょうか。しかし、ふるさとへ久々に帰省して感じるこの何とも言えぬ違和感。ふるさとには遠く離れたところから思つたものであって、ここに居たのでは悲しい気持ちにさえなってくる。たとえ乞食になったとしてもここは帰るところでは

もはやない、ああ早く東京へ戻りたいと思わせる、この気持ちは一体何なのか。あの頃の友人もいなければ、養父母も実の両親も他界し、景色すら変わっていた。人間はそれぞれ意味の世界に生きています。それは一瞬一瞬、絶えず変化している。帰るべきところがなかったと気づいたとき、もはや行くべきところもないと感じることでしょうか。没後、室生犀星の遺骨は金沢市郊外の野田山墓地に埋葬されましたが、それは犀星自身が本望の願ったことでしょうか。真の意味で、ふるさとには何でしょうか。

僕は父と母とをうらんだ

父も母ももう死んでた

僕はほんとの父と母とを呪つた

涙をかんじたけれど

もうどこにもその人らはあなかつた

(「自分の生ひ立ち」)

人は老いて、やがて死んでいきます。老いながら、体力の低下や身近な人との死別などを通し、世界とのつながりが少しずつ絶たれていく悲哀を味わい、時々刻々と不安に鞭をうたれます。その苦痛と不安から逃れることは誰とてできませんが、自ら創る「意味の世界」に在ることこそその苦痛を和らげているのでしよう。たとえばわたしは、南無阿弥陀仏の世界、阿弥陀如来の世界にいて、阿弥陀如来に我がいのちを受け止めてもらうことで、こころの安らぎを得ています。外から見る人には、きつと滑稽に映ることでしょうか。しかしその世界にわたしは、ことばを超えた満足を感じています。(住職)

宗教にも「業界紙」というのがあり、以下はある業界紙に掲載されていた、終活の相談を受けているライターのコラムからの抜粋です。◆終活相談では葬儀についてよりお墓に関する相談が圧倒的に多く、なかでもベストワンは「お墓はいらな  
ないと思うのだけれど、どうすればいいか」というもの。しかし、お墓はいらな  
ないという相談者のうち、散骨を決断する人は全体の一割に満たず、樹木葬、納骨堂、合葬墓、デザイン墓など様々な選択肢から最終的に「お墓」を選ぶ人が九割。つまり、「お墓はいらな  
ない」のではなく、「(今ウチが守っているような) お墓はいらな  
ない」ということ。今ウチが守っているようなお墓」とは、護持費が  
かかり、後継ぎが必要で、新しく買えば高く、しかも何十年も変わって  
いない古いデザインのお墓。◆一方、散骨を選ぶ人は、最初からよ  
ほど意志が強くないとできないとも書いています。意志を左右する  
のは、「どうしてもあの海に還りたい、など願いをかなえたいとどこ  
まで思うか」というものと、「お墓はいらな  
ない」と本当に思っているかどうか。しかし、本人に確固とした  
信念があっても、あとに遺された人が果たしてどこまでそれを受け  
入れるか。あとに遺された人の多くは、散骨した

海へ命日やお盆の季節になれば出向いて、手を合わせている。それは海がお墓と化したわけで、「お墓はいらな  
ない」という故人の願いがかなえられたとはいえないのではないか、と指摘しています。◆コラムは続きます。「相談者が求めているのは、埋葬の選択肢を知ることはない。彼らはお墓という問題が持ち上がったとき、ど  
っしりした死生観が自分の中に存在していなかったことに戸惑い、混乱した気持ちを静めるために『葬式はいらな  
ない』『お墓はいらな  
ない』と言う。それは単にスッキリしたいからで、根本的な解決にはなっていない」と。◆根本的な解決につながるよう、死生観を互いに共有しようと努力することは大切なことです。遺骨をどうとらえるか。遺骨にどう向き合うか。遺骨を意味づける世界観は数多あって、どれが正解でどれが不正解と言えないと思  
います。宗教的な行事や儀式が薄れていく流れは止めようがなく、病院や施設で息を引き取ることが増えて家庭から死が消える流れも止めようがありません。埋葬方法を数ある選択肢から選ぶだけで、以後長くこころが安らぐかどうか。わたしも宗教者の端くれです。わたしにできることがあればご相談ください。(住職)

### 【7月、8月、9月、10月の活動】

7月15日(金)19時(毎月開催)

親鸞聖人御消息講座(第31回)(フレサよしみ)

7月17日(日)11時

盂蘭盆会(お盆の法要)(築地本願寺)

8月7日(日)11時

盂蘭盆会(お盆の法要)(浄泉寺)

8月20日(土)9時(偶数月開催)

写経会(浄泉寺)

9月16日(金)19時

親鸞聖人御消息講座(第32回)(フレサよしみ)

10月9日(日)10時~15時

法話会「ブツダの教えと大乘仏教」(浄泉寺)

石飛道子氏(北海道・札幌大谷大学特任教授)

10月15日(土)9時

写経会(浄泉寺本堂)

10月21日(金)19時

親鸞聖人御消息講座(第33回)(フレサよしみ)

毎月第一日曜日 9時 あいる書道会(浄泉寺)

◆年一回開催の10月法話会、今年は10月9日(日)開催です。ご講師は札幌大谷大学特任教授の石飛道子



さん。午前10時からテーマ「ブツダの語ったことば」、午後1時からテーマ「龍樹が語ったことば」について、「わかりやすくお話ししたい」と先生は意気込んでおられます。ブツダは語りました。「わたしの教えは論理と法である」と。ブツダ滅後およそ700年経ち、龍樹がブツダの教えを体系化したと言われます。龍樹はインド生まれのお坊さんです。龍樹の教えがブツダの教えと大乘仏教をつなぐ役割を果たしていることから、龍樹は日本でも「八宗の祖」と言われ、天台宗や真言宗、浄土宗、曹洞宗など八つの宗派の祖師として尊ばれています。日本で仏教学の分野に女性研究者はいまだ少なく、なかでも石飛先生はわかりやすい著書が人気の売れっ子です。参加にはご喜捨(お布施)をお願いいたします。いくらでも構いません。イス席です。午前だけ、午後だけの聴講でも良いですが、午前午後を通してゆっくりお聞きになる方は昼食を各自お持ちください。詳しくはTel0493-54-8803浄泉寺まで。